李寓記解 改正月令博物考 春部 四

春部目録

△印は春三月に出る季のものあり

○春は天気の白候養生の法は十九ノ巻に有

春風 △東風 春ノ一丁
△遅日 春ノ三丁 △糸遊 春ノ四丁
春雲 △春の天 春ノ二丁
△春月 朧の月 春ノ四丁
△春夜 △春朝 春ノ六丁
△春夕 春ノ七丁
△春曙 △春望 春ノ七丁
△春山 春ノ八丁
△春野 △春郭公 九丁
△春海 春ノ十丁
△春川 春ノ十一丁
△春雨 春ノ十二丁
△霞 春ノ十四丁
△あやめ 春ノ十七丁
△長閑 春ノ十七丁
△水ぬるむ 水ぬるむ 春ノ十七丁

春の雜

此部に春三月ふるまひ事をあつめむ乃雜事

△佐保姫 春ノ十八丁
△木地爐縁 春ノ十八丁
△東宮 春ノ十八丁
△霞洞 春ノ十九丁
△雙調 春天氣 春養生 十九丁
△春ごとや 春ぬる 春ぬる 十九丁

草木

春の部の草木は正月の巻に出てゐ

△木 春 九丁
△薺菜 春高 春 九四丁
△蒙菜 春 九四丁
△渡陵菜 春 九四丁
△秦菽皮 春 九四丁
△山葵 春 九四丁
△三葉芹 春 九四丁
△海苔類 春 九五丁
△石蓴 春 九三丁
△芹 春 九三丁
△嫁菜 春 九四丁
△椿 春 九四丁
△穀精草 春 九四丁
△雜菜摘 春 九丁
△獨活 春 九四丁
△蘘荷の花の句 春 九四丁
△鹿角草 春 九五丁
△種植 穀種 春 九五丁
△鶯 春 九六丁
△百千鳥 春 九九丁
△鷽 春 九九丁
△雲雀 春 九九丁
△目刺 春 九九丁
△駒鳥 春 九九丁
△干鱈 春 九九丁

春生類

春の部にれんも(二)此部にある。りのハ二月ふも用ひ

春 目録終

春之部

△此印あるハ春三月ゟ季之

春時令

此部ハ春三月ゟ季之なる季の物をのす

春風

○東風 春吹風いのゝゝ

みしそ ちつゝ ゟりのゝ

春風ハ地下ゟ吹上て地中の生理を発出し曠野青し是春の應ゟ○

卯ゟ風ゟけハ其年大風ゟ

五月西春ハ南ゟ秋ハ北ゟ

東風して雨ゟるとき ゟまとゝ

哥ハ俗説ゝゝ

ゟり春ハ木ゟり南ハ火なり南

風ハ時節の氣ゟり相生ゟ

方の風ハ雨ゟ彩方角ゟり時

節の氣と生ゟれハ晴北ハ水春

木ゟり水生木く生ゟれゟり

北風ゟけハ晴ゟり尤西北の風を

乾風

ゝハ四季ゟりふ晴ゟり東

北の風ハ常ゟハ雨になるゝ

とし春い北風うそ晴ゑと以て東北といへども雨よりゑ〻ば申酉の風とまぜとの人常にい晴とにかさどふといへども春い南風まそ雨とゑるゆへ未申にゑる羊頭といて雨よりゑ〻ゑ

哥　拾遺　躬恒

吹風とゑふいとひそん梅乃花
ちりゑる耐て香いまそうけゑ

同　春風不分処　後京極

あしまへて氏の家でも折ゑびき
君が世代よい喜うせぞゑく

詞　胡蝶　ゑるおち。夫ごち。

俳　春風や三源の松ゑ清ゑる　鬼貫

詩　春風　五字對句

煙花宜落日　春風開紫閣
絲管醉春風　大樂下朱樓

詩　春風七字對句

只言啼鳥堪求侶　搖春風
無那春風欲送行　野外昏
春風夜動蘿衣薄　度春風
芳樹朝催玉管新　逐春風
霽日滿江寒漏靜　動陽春
春風遶閣白蘋生　待落梅
寒雨送行千里外　任好風
東風沉醉百花前　舞東風

詩　春風ノ詞　高遠

明月斷魂清靄々平蕪歸路

緑沼々 此二句春月人生・莫纏ノ對句ニ出ス

頭如雪縱得春風亦不消年ヲ

頭雪ノ如クナルヤソニナキ用心アレ
頭ノ雪ハ春風ニモキヘサルゾ

春雲 風と同し西風吹んとしては先雲西より東へ行

又降晴と云る事風の方角と同じ西南より東へ行と出雲を晴る西の東北より西へ行を入雲ふる雨なり或ひは東南東北より雲と入るも雨西北西南より雲と出るは晴西南

とゝ云ふ南より未申のあいだより雲出ると沖氣といふて雨なり

(詩)雲ふかくして花も落るなんの法皇

(詞)雲おびく。雲おびく。さきまで。さて。こも間。ゆたうん。雨をも

春天

(哥)春の空はいづまのぐと
草庵集
野がけ霞ふくて田子の浦ふ
ぬかてくれば山の端ひ

(詞)のゝなかのうらゝかぬ

(俳)春の空細きこゑの月の雲 其雲

(詩)春天五字對句 同上

碧落三天外 山川亂雲日

黄圖四海中 樓閣入烟霄

(詩)春天七字對句 詩礎

雲斷岳蓮臨大路 樂春天

天晴官柳暗長春 兼煙霞

山河香映春雲下 拂春雲

城闕參差晩樹中 入洞天

春日

㊁ 北山殿
足引の山路も晴て春の立日新は今始かなりけり　為世

嘉元百首
かすが野もちらさぬ程に霞たちのどけくも暮ぬけるか　忠房

㊂詞 めぐる。初る。天地に春来。日永。日暮しのどけきこそ。うらゝ。霞の中に日永。霞むめぐむ

㊂連 千里をも見るべき春日かな　宗春

㊂俳 ひよつ鳶で出ぬも悔し春日哉　鬼貫

暖日や庭に雀の砂あびて　嵐雪

㊂狂 見わたせば柳桜に那流れの係遅き春ぞてゆく東山　数二

遅日

△永日△暮かぬる△暮遅き　春の日あし。右は皆春の日の暮れがたく長き日の心へ

㊂ 新古今
我やどの山辺にあくがれ暮しつ　貫之

六百番歌合
夕暮はまだ明けのけしきに暮れそなたの空に絶えぬすれ　有家

万葉集
うらうらに照れる春日に雲雀あがり心かなしもひとりし思へば

㊂詞 夕暮。春日の遅く。千里の花で有乃宿の鋪。みちうれて。花乃宿

㊂雑 余花の春ひるぞてふ花代　重五

㊂句 遅き日のつもりて遠きむかしかな　蕪村

㊂狂 青柳の糸くりかへて春の日をよそに織るむ日のながさかな　二橋

㊂詩 遅日五字對句　同上
彩雲歌處斷　遅日曠方照
遅日舞前留　高齋淡復空

㊂詩 遅日七字對句　詩礎
桃源洞裏居人満　淑景移

桂林山中佳日長　他山

春風自信牙檣動　ニハカニ　ホハレラ

遲日徐看錦纜牽　チジツヤウヤウ　ミル　キンランヲ　ヒキ

遊糸　遊糸ハ春の日のどかな時空をそれ乱れるやうに漂いの

陽炎　野馬。日かげ小塵の乱れて馬の走るごとし。荘子ニ野馬ハ塵埃なりとあり

遠春遲　ハルノヒ　ナガシ

寸斜暉　イリヒ

日光遲　ニチクワウ　ナガシ

(哥)六百番

ちりかへる春の糸ぢ遊ぶ世をてあるしらぬそらのけしきかな　定家

春月　臘月　おぼろ月　○春の月い艶なる物ゝ

(三)新古今

ぬばたまの夜の更けぬれば久方の月の出でぬるかたぶくまでに　大江千里

同

雲晴れて雲間の月の澄まれば夜の衣の袖ぞ寒きし　源具親

夫木　春山月　入道摂政

もゝしきの山ぶきの花ちりぬべし月にうつろふ春の風かな

同　後九條内大臣

深き夜の春の山ぶきうつろふ月のあかしの月のうつろひ

同　定家

たちかへりおぼろ月夜の春の風ぬれぬるかたぶくまでに

續古今　花洛春月　家隆

春の夜の月の風もあやうしと花の匂ひの名のみ

風雅　河上春月　有兼

春の夜の月の光のうつろふ色なる川の音をきゝて月ぞかをる

夫木　為氏

春の夜の月の光のあはれ実ぞ春の夜の月の光のうつろひ

同　霞隔月　宣房

月の影ぬれぬ春の夜のうつろひ

ひろうにあるゐ去れくの月。

詞 霞に入る。霧のそこ。秋は

の月。勝月花。遠の春。のどか。

みどりに風ふく。曇りもやわらぬ。

比春れおくひんにくし。春けの月。

かもみの花。みかりとむ花げ

連 霞じくも春とい物 紹巴

俳 春に合ぬ月曇や 勝月 其角

孔雀い二初蘭の 勝月 十摩

天の春むり月やの色 宗因

月春の夜乃月に晨じ 三州

詩 春月七字對句 詩礎

何尹 天明坐莫辭 懷清霄

春城月出人皆醉 月朦朧

明月斷魂清霄々 照野梅

平蕪歸路綠迢々 影含烟

同上

苔澗春泉滿 琴伴前庭月

蘿軒夜月閑 酒勸後苑春

詩 春月詞 劉方平

更深月色半人家 北斗闌干

南斗斜 夜更ニシタガヒ月モ今

夜偏知春氣暖 蟲聲新透綠

窓紗 秋ノ月トチガヒ夜深レトモ

アタヽカニアリトヽ

詩 同 諸光儀

映門淮水綠留綺 主人心門前水流

緑リニ風景ヨキニ明月隨良緣春

潮夜々深 月モ君ニシタガフテ

ユキ潮モソフテ夜

夜ニフカクミ

ツルトナリ

春夜 續後撰 久我大政大臣

天はれ春夜ふかくえは

風に月はつゝも花の香ぞともに
(詞) 霞む。山の端。霧む夜。霞ゆる。
匂ひを花の雲にかゝる。ゆふ人かそれとわかぬ
(俳) 朧々夜やゆく人かへる新かし
(狂) 人目さへそゝうかとや春はよの
おぼろ月夜に志ぐるゝのは　可由

春朝

(古) 新古今　藤原家隆
霞たつ末の松山ほの
ぼのと波にはなるゝ横雲のそら

(詞) 春の曙。かすみわたる。のどけさまさる
朝。鶯さそふ。鶯まづ鳴。鶯舞ふ
霞溶。末の松山。ほのぼの。柳の色

(俳) 朝の間の梅の香も来て咲らむ　移竹

(詩) 春朝七字對句　詩礎

華堂翠幕春風至　曙光寒
繡閣金屏曙色開　送曉鶯
春浮玉藻寒初落　月沫收

露拂金莖曙欲分　入晨遊

(詩) 春曉ノ詞　孟浩然

春眠不覺曉　處々聞啼鳥
夜來風雨聲　花落知多少

春ハ子ムリ多キユヘ夜ノ明ルヲ知ラズ鳥ノ夜
啼カトオトロキ目サムルゾ
夕べ雨風ノオト
ヨキ夕ガ定メテ花モサゾチリニシト思フナリ

春夕

春の夕ぐれとよむなり
暮春とハ春の末也

(古) 玉葉　為子
ひゞくゐる声のどかにて遠をちの
山ハ霞める春の日ぐらし

(詞) 夕かれ。霞かゝる。なまめく
夕霞。夕日かげ見える。霞ゆき

(連) 梅か香ハ静にちりし夕月夜　不知

(俳) 淋しさも寺らや春の暮　五綾

(狂) 山寺の春の夕暮来てみれバ入相
のかねにそ花ぞ散りける　前大僧正慈圓

(詩) 春夕七字對句　詩礎

・綠水殘霞催席散・隔暮雲

・畫樓初月待人歸・夕陽遲

・小苑迴廊春寂々・敲餘暉

・浴鳧歸鷺晩微々・目覺閑

春興 春野山を遊びて興を

ほと事あり

(三) 新古今

家隆

ふるへぐちそこもとすべ彩雲

花の春ゆせ野べ乃雪

(詞) 梅宮。柳。下紅。弱柳。さらび。野べ

春望 春の野べ海川野山とも

おりしろく雲めのそむ心

夫木 綺中眺望 有家

むさし野のべの草はいかもそるふ

そらにみどりの色もわれなと

(詞) ちるら。紫宝。もかとむ。かとこ彩

春の山川。のうれる。詠先々る。

ゆ。ゆ。の春。多めも去れ

(詩) 春望五字對句

白雲回望合・城闕千門晩 同上

青靄入看無・山河四望春 詩礎

(詩) 春望七字對句

白蘋・楚水三湘晩・樹中分

芳草秦城二月初・春色明

近郭乱山横古渡・景物滋

野莊喬木帶新煙・接人烟

(詩) 曲江春望 唐 盧綸

菖蒲翻葉柳交枝・暗上蓮舟

鳥不知曲江ハ禁中ニアル江辺ハ

景ヨキ所ナリ柳モ枝シ

ケリ菖蒲モ葉サカヘテ夏チカクモ末ニナリ采蓮ノ舟ヲ催スコロニモナリ更到無花最深處樓

金殿影參差花チリハテ、タヾ見ルモノハ金銀ヲカガリレ樓殿ノカタタガヒナルカゲノミゾ

詩 西亭春望 西亭ハ西ノ京ノ宴ノ屋宮殿ノ 王昌齢

日長風暖柳青々北雁歸飛入窅冥 春モ半スグルコロ雁ノヨノガカヘラント雲井ニトブヘ

古サトニカヘラント雲井ニトブヘ

岳陽樓上聞吹笛能使春心滿洞庭 笛ノ音ヲキクニツケテ故郷ヲ慕フ心イトヤウ

春山

春ハ卅木もさうえて山のまゝきおりろさ事ちろ

忠岑

(三)拾遺

まゝこのりいろそうたやこを山ゝ山も霞ゝてけさはゝゆゝん

夫木 春山霞 家隆

依保浦の名にあるゝ山ゝけさもかすみけるゝ

山家 深山不知春 藤原公重

雪ゝて外山の谷ゝうぐひすとはよりくのはるゝ春やつぐらん

詞 春の山ゝ。山の端ゝ。遠山。うぐひす。鶯。花。雪。谷。やまぢ。

枕 花ゝ。春の山ゝ。山ゝ。

(往)四方山ゝ霞の春のゝ春のすゝ春ゝ

詩 春山五字對句

緑野明朝日花雜重々樹

同上

青山澹晚煙雪車處々山

詩 春山七字對句

井轉轆轤千樹曉蒲春山花ノサカリ

鎖開閶闔万山春隔暮雲

詩礎

遠山積翠横海島　五嶺春
殘霞飛丹映江濱　花滿山

詩 春山ノ詞　劉商

君去春山誰共遊　鳥啼花落水空流
如今送別臨溪水　他日相思来水頭

君カヘラバ花鳥ノ風景モモノサビシク流水ノミアリテ物サビシカラン
今溪水ノアタリマデ別ヲ送リ来後日此流水辺ニ相思ヘトナリ

春野

哥 万葉 春のゝにすみれつみにとこし我ぞ野をなつかしみ一夜ねにける

詞 あさみ。春雨にそむる。ゆふぐらし。道のべ。みどりそふ。むらく。かれ草。かれおろ月。かげろふ。見まほし。若まえ。淡雪。かすみ。雲間。ろみ。あれさ。みか月。つぐみ。とみる。ほころび。野遊。若菜。糸柳。さくら。雉子。雲雀。春雨。梅。柳。瓦。ほくし。

俳 むつていかく春乃麦　来山
春の野や蝶のとまるかゞり桶　黛山

詩 春野五字對句

臺樹春光媚　野竹池亭氣　同上
郊原遠樹平　春花澗谷香

詩 春野七字對句

聽雞曉闕踈星白　落芳塘
走馬春光細柳黄　入平蕪
田夫就餉還依草　野外烟
野雉驚飛不過林　春色深

詩礎

春郊

春の野乃事 六百番哥合 隆信

ゝるのゝ人のゝ子ゝ山のかゝしひさて
別ゆゝ野ゝ色のゝ子ゝのかげゝる

續古今 物本人麿

ゝ子ゝ来ゝく春日のゝ子ゝをみゝ
小ゝもりがゝうゝへゝ霞ゝゝるびゝく

(狂) 若菜ゝゝ摘ゝ摘ゝ
つむ世ゝ子ゝあゝゝひゝもゝ忘ゝ 蕉卿

(俳) 摘菜ゝゝゝゝ日ゝ子ゝ月ゝ ゝ家

(詩) 春郊詞 秡粹

水遠江渠漸有聲氣融烟
塢晚来明水声キコヘ野辺モ春ノ
氣令ユキタルヲ

春海

春ハかをゝなびさゝ
海のけゝきものゝゝるゝ

(哥) 四季百首 定家

白菜の白ひゝ秋も忘れ者
知ふゝ岩の去れうゝ風

(詞) 春ゝうゝ。霞なゝ引。ゝゝか
ゝる。霞のひゝ。霞ゝゝゝゝ。
浪の花。月ゝ光ゝゝゝ。霞と
ゝとゝる。ゝゝ吹上のゝゝ。緑ゝる。
春の浦ゝ。ゝの海のゝゝ。

(俳) ちゝ紙のゝゝゝゝゝ海花縣

(詩) 春海五字對句 同上

月明三峽曉氣清連曙海
海深九江春雲白洗春湖

(詩) 春海七字對句 詩礎

山入白樓泝苑暮渡江春
潮生滄海野塘春遠春流
雲夢夕陽愁裏色深湖波
洞庭春浪坐来聲洞庭春

春川

川さへ梅櫻の水ふくれ
そのすぐさまあらひい花の
ちらうらうめる体雪消て水も
さらさら体みどりなるかをつかへよめり

哥 夫木　公親

六田川宮の柳のそこなれ棹
わくあさんてるる波さもそうり

詞 春の来ぬ。わのく霞む。去の
あけぼの。掩おそゆる。らくる氷。鶯
ものこと。せりなくぐ。岸のやをさ
ぎ。緑のつまえ。月見。仙鶴

相川そひや。雪。緑の。

詩 春川七字對句　詩礎

樹色到京三百里　渡水人
河流歸漢幾千年　逐水平
湘潭雲盡暮山出　盡清流
巴蜀雪消春水來　弄晴川

春雨

春雨ハ音ふく生ものや
ふるる物さひしきこ

良教

哥 建長百首

春雨のさるびく宮の苔柳
うけてこそうるくそ嶺はそ〳〵

新後撰　庭春雨　大政大臣

世はなれる身のかくれぬのふるたふ
きるこそ〳〵のみ庭の春雨

夫木　旅春雨　知家

旅衣ぬきてそ袖のくるさ
庭ふりかくるさ見あそ〳〵

詞 雨。くるる。去見。れやで去
げく。それ見。そびる。かさく
らば。かさくれて。かれくれ。
そくぞ。りな。衣ぞる。さそ見。ここのめ春
雨。去のみ。あ川さこ。そして春雨
やぐむ李木。霞ようる。くるくも
ワうぬ。考みさ。嬉るくもこうぬ。花
を見くむ。下落る。去落。○雲去ぞ
ぬ。むぞる。去。雨去をふ紀風
雨風。風ぞ去。糸。なめ。糸。彩。紙。

糸ゆ。笠かさもとりとあへぬ。のぢ笠の雨。俗語袖の花日上夕雨はれぬ。雨夜。閑樹。雨ぐし。夜雨の秋。雨夜。灯のさえうも雨なる。軒雨そそぐ。雨もれおとあ。雨の糸ゆ。雨の糸ゆ。雨の下露。旅枕衣。雨ぬる。笠はれたる。笠の春雨。梅の雨。憶佳人のさハつ。朱ぬれ。ことゆる。涙雨を出る雨

連 雨雨の野山をそむる。これ汁宗養雨雨のおとはのきはの竹をふ汁紹巴

俳 春の雨花さそ花の雨柳汁宗水春雨やゆ。ぬ影ふもきん桶來山

けり雨に花ぬ人やあれの雨 其角

雨雨やはしひきの見の髮 十磨

狂 かきつり嵐ふる雨春はそ。さびしさまけるる雨ゆちらく 走帆

詩 春雨五字對句 同上

野館濃花發 海暗三山雨

春帆細雨来 花明五嶺春

霞 △春霞 △初霞 △一ツすそ

△霞洞 △霞海子 △霞網 ふ見ゆ △霞仙人の酒と流霞と △霞衣 △霞汲

△霞袖 △八重霞 八重ふかさ △鐘かすむ 分れうぶ霞 ○霞関を乗 ○霞谷市のと以上二名非季

右いづれも霞のことなり。春の時空中おびただしき霞の如ある

とりの本字ハ霧ゆ或ハ蒙とか

連 ゆ方の海ゆ霞 肖柏

俳 武蔵野の霞 肖柏

ハ霞のあり霞ゆ霞ゆ無名氏

松ゆ霞ゆ霞ゆ立霞 ゆ霞ゆ立霞

綱 ゆ霞ゆ嵐雪

哥 夫木 定家

みちのくの春の霞の立ぬにて

ゆ霞ゆ霞ゆ立霞ゆ白雪

同　野径霞　全

春日野のかすみの谷の山風に
春のゝすゑにたゞよふらしも

建保百首　海霞　全

かぜたえて波もてゆへる山やまに
うちなびくかすみの浦を

建暦哥合　山家霞　為家

谷の戸ぬりこめの色あまたまくふ
ふかくてゆけやさくらの夕ゝ粉

夫木　海辺霞　参議為相

ふるさとの夕ゝ紅さくさゝ波路に
かすみを出て帰るふねかな

續古　朝霞　家隆

春の夜のあけぬるかぜに
出る朝日もなほうたむらん

夫木　河辺霞　成茂

水とやさゝの柳のかげ
うたゝねのこゝ地のちるまくを

建保哥合　野霞　順徳院

むさし野やかすゝまくはたゝ萩の
みゝばそかたもむ春のむらぎえ

同　堤霞　堤の柳のかすみ
春の日の長閑にうすむ霞をまつ
ゆ春
ゝとをゝろぬ。うらくかすゝ
えてぬ。雨妙ゝとをゝろぬ。霞も
色ん。春をくかすむ。花花の枝と
かゝと。霞は中に匂ひ春る柳　山本の
柳ゝとむ。この柳ゝとむ。霞ふかく風
なびてゝとむ。梅　梅の枝の極ゝとむ。立
枝もかゝ数。霞の中に白ふ春。
松風ゝとて松原ゝとむ。檜原　桜原ゝ
とむ。桜原霞かゝりの元乱もゝろ
也。竹　春の緑ゝとゝとゝ風ゝ春
堤。堤の柳ゝとゝ。堤の柳ゝとゝ。堀
久の煙ゝもゝろぬ浦く霞む。関関
はゝゝる。霞ふゝゝ。霞と山の
詩人　森本の枝もゝろぬ風ゝ霞。
里里の煙ゝもゝろぬ。里遠くかすむ。
我ゝとむ里は夕霞　河辺の春ゝとむ。
霞ふむ日ゝの河辺。この柳ゝとむ。岩辺
ゝすむ。橋　霞をゝゝとむ。霞ふ弁て
ゝる。霞ふかくる。霞て遠き川橋
日の長閑にうすむ霞をまつゆ春
ゝとをゝろぬ。うらくかすゝ
えてぬ。雨妙ゝとをゝろぬ。霞も
色ん。春をくかすむ。花花の枝と
かゝと。霞は中に匂ひ春る柳　山本の
柳ゝとむ。この柳ゝとむ。霞ふかく風
なびてゝとむ。梅　梅の枝の極ゝとむ。立
枝もかゝ数。霞の中に白ふ春。
松風ゝとて松原ゝとむ。檜原　桜原ゝ
ゝとむ。桜原霞かゝりの元乱もゝろ
也。竹　春の緑ゝとゝとゝ風ゝ春

居所霞の窓。うゑむ彩霞。花のふく
かぜ。霞む垣根。春霞の衣。佐保
姫の衣。霞みの紐。旅路。山のうすゝ
もゝ。はるかなる。故郷。山とかすむと無常。辺土霞
山霞。霞ものゝ。霞の戀。霞の
屏風。霞の帯。霞の袖。霞の
あるうとたちなびく。霞の橋。霞む。霞
霞。霞ぬ。霞ぬ。

(狂) 九重に春の霞むあるこの見風
なるうぐいすやけんのぐるまり 女風
見まくて雲のうゝ歌
なるふゝぬまんて霞ろん 法心上人

○詩歌作る霞と本朝の哥ふ
詠まる霞といちがつう歌連俳み
詠じて春の季に入るい蒙とふ
ものみて霞と詠と春の比天
氣の霞ふるをいふ又詩ふはふ霞
霞い朝霞晩霞のるい本朝み
ていあさやけ夕やけの事みて
今いかゝとこの事みている

霞見い詩まつらるゆすみ
本朝俗ないふ朝やけ夕や
けの事〻日のてるゝ東の方
赤くしてきへざるい早くきゆ
い雨ふるゝ〻一面まあるい
二三日の内に雨ふるあり日
の入て西赤く南へまらる
い晴あり。かすむの事委〻
くい本篇博物笠といふ書
物にのるゆへあふ畧ス

(詩) 霞五字對句

霜空澄・曉氣 同上
聖藻無寒・露
霞景堂芳春
仙杯落・晩霞

(詩) 霞七字對句

雲開日月・臨青瑣・巻曙霞
風巻烟霞・上紫微・晩霞多

・詩礎

遠山積翠横海島趨紫霞
殘霞飛丹映江湄向晩霞

仙茶

長閑

△暖△温△麗○春の日はさむきのうれひもなく天氣ほどよく和暖ふみのうらうらをゝ麗も同じ心あく百花咲乱きてうつきと云心とぬくめり

(哥) 玉葉　永福門院内侍

をちこちの花乃かゆりもやゝ見えてゆる霞のうちそのゝけさ

(詞) 夕日。ゆふ都。ゆふ人。うらゝ。眠猫。霞。山の端。そのゝけさ。松。ゆる。春の日。花。鶯。春。春。春。春。扇。春の日。花。鶯。谷の戸。出る。春。柳。糸。

(俳) 附津風私のどけさ和国の永〻〻やゝ田の中きる苗一有

水ぬるむ

△いてそひるゝ水あさゝか氣そゆるむ春の氣

水ハ陰氣のゆめく冬ハゆくまゝて氷とゆる春の陽氣を得てゆるむものゝ

(俳) 水ぬるむ比いとゝ山あり石　阿誰

(詩) 水暖五字對句　同上

春風增風色　川原通霽色
麗日叢光華　田野徧春容

(詩) 水暖七字對句

旌旗日暖龍虵動　居住閑雲過遲
宮殿風微燕雀高　趣轉閑
芳郊緑園春晴散　玉生烟
復道離宮烟霧生

詩礎

春雜

此部ハ春三月之ゆ〻ろ混雜の物とのす

佐保姫 春の造化の神也かくらちあるてあらべ天地の色をあらるをとかりみふづ事とるなり袖下集に四季の姫は歌あり俗佐保姫の吉野の山に住てて代々を奉るとかの玉

(哥) 草庵さ姫の古歌もきさ紀名もちろ霞ふさある春のふり殆頻阿

(詞) 春の両々の風多多佐保姫の霞れ衣さ姫の神也なの神也なの花咲山のどうぐうさえう人哥

(排) 佐保姫の家作り色鶯宗俊

(狂) さ姫の霞ろ衣めしさ一ゆけさ仕すとうのれ　走帆

木地爐縁 数寄屋かこいの炉ろ茶人冬は炉ふ塗ふちと用ひ春は木地を用ひ春は自然しやうふ塗ふちそいかころ又人ふ塗ふ

東宮 春は東と主ろ宮どるゆへ季ろ春いまぐ御即位なき親王の御事と申と也

霞の洞 天子の御位と

とぐせゆへと仙洞と申奉るその御事と申季ふ用る霞の洞は仙人の居所なき八目出度なく奉るへ

雙調 春の調子ある春は方物と生もろ其音は木音ろ内裏ふて舞楽ある時春はこの調子なれば

春かあづや (哥) 雪玉集

ろろ紀とろへとけもろあ〜い荒田のすふあろや

春ぬ (哥) 伊勢物語　月かあぬさやむりみ

ろ〜ぬ我ろひろ春ろぬいりこのふ〜く

(哥) 後成卿百首　春ろぬ紙ふの高も秋ふろ紀清ぬ也ふり

春養生

素問曰く春三月こゝを發陳し〻て天地共に生し〻萬物以て榮ふ夜に入り卧し〻早く起き庭に広くを歩し〻髮を散し形を緩くして志を生ぜし〻殺すこと勿れ賞して罰せこれ生を養ふの道也

春天氣

春の初甲子の晴は吉天氣はよく甲子の晴は凶

春中雨多し此日ごろの事多し殊らず春は物のもえ出るの風雨もこれなり惣て春の事多し殊に甲子は干支の始なれば此日の晴雨も多くつゞきて春の南風は雨を生じて春の雨は歌ふも詠如くなり

降續くれば晴んとす四方山の根雲ちぎれ立登るは此時風は東に替る又北に吹上て日和かゝれは晴ると云共寒くして四五日の内まゝ雨あり

春草木

此つゞき春の草木の名は先四月の季如此ちらし〻ろ〻に用ゆるも〻なり

柳

△楊もかく △ちぐり柳 糸の如くちぐり柳 △川柳 枝ぶりしてそ水辺に生る

△川柳 同 柳に同 △昔柳 △昔柳 谷にてらく山

△たこ柳 △こぶ柳

柳異名 金絲。白線。点花。弱柳。樹聖 △門の柳 門に五本入てこれ柳と云

△王拂 王拂は柳の異名と云

△風見草 △風無柳 五柳先生とこふ柳の異名と

△根水草 △柳の髮 柳のうるはしき女の髮

△柳の眉 美女のまゆ 美女のまゆを柳の眉と名づく

△春すゝき △柳ごり

三月 万葉

蛙なくむつのそぐの川原なき
称もうるはしとあうめ君うと

八九

堀川百首 後頼

もかり私ふつ ちめるいこいせよ
いそいゆるぎ風みたるみを落

文治百首　定家

遠くより見みどりなびくふちなみの
まくらかくるの庭乃あさ中ぬ

夫木　岸柳　伊勢大輔

ながの柳のいと絲よりひいくかはい
さらに近くこそちらまわらまき

夫木　杜柳　匡房卿

ちらとへてあまそりぞちくまぐくん
いとようかくるまき柳のうり

建長千首　可柳　光俊

せ絲をやくくみかさねれい玉川の
いろぞひ柳　えぐぞそるゞ彩く

建長百首　水卿柳　仲正

星をたに定の河色はうるおるぎき
やづへをぢとりかつぐせよくら

夫木　水辺柳　家隆

立田川中まくにいあれぐかりわの
色をそめくくまくまの青柳

同　閑居柳　兼宗卿

我宿のいろくく柳うちなびく
くるぐ乃糸いくくく彩くすく

詞　なびく。行くくくてよくるる。彩
野遊糸柳。美濃。路立よりてくる。

彩くくもくくる。まき柳の陰よむ花。
河岸の柳。いそい柳。沼にひ高。
めまてをもこ。弱の手にまぐく底る
彩をおあ深おまぐく。肥。岸の柳。砂

とけて彩くる。波ふまくるを堤慌乃
柳。さく柳。うく柳　離よぐ彩くよ
を。離のをひ垣かきの柳。垣根乃
柳。庭　柳　門門の柳。たが柳。田

門田ふるびく。糸　柳のまゆ。青柳の糸
柳。眉の深ゝ糸。花田の糸。風よう
くくる。うちくる。風　風ぐり
なる。柳の枝ゝある春風。柳ゝよる
まき風。をかみくる。風ゝよりくる。風
ゝまくする髪柳の髪風ふるゝ。み

くくの髪。柳の髪。眉　みぐり眉の
眉ゝ見　くくり柳の糸ゝ眉くくり。尼立くくり。

作引眉の糸。露糸ゝ玉ぬく。ぬき
くる。枝くくをくづる。ぬきくくぬ

露の玉。風にみだるゝ　庭　龍ふかびく

又庭の表をみゆ　烟けぶる柳。名の本の　乗りも見えたり

芽柳のそよぎよりこそ烟の似より　鶯本たる　みまことにそすりもあるより

さへ柳のうつる梅柳が枝も旬かな

風櫻枝の下も柳の糸にぬきとめて

風よそく　斗姫さね姫のそる　又手綾の糸見しそうり

遠村。誰宿の新柳。汲汲の堤柳

にさし條糸雨霞吹ける。雫を手ぐさ。

風なへて雨にみだるゝ　故郷ふるさとの

みなれの柳。行人まうさ新枝。山ぺよう

入江の柳。家の土柳。新の　すびく禅まで柳のろうさ山

青柳。池の柳。土柳。柳へみどり。るゝ

ひく柳。川柳。去りよ枝。柳乃眉。

柳の糸。めぐり柳。若柳。柳の髪。

㊟春の日の蕙柳しう柳の中を

柳のかげにむる風乃くゝ行風

猿沢の柳まこの髪ありくと

月へまりて新うつりけり　常楽菴

㊧行と来ると柳やたのうり　素蛛　紹巴

柳より花や春へし春の風　宗祇

㊕ちりかゝるとすゞしくほぐるゝ柳かな　其角

傾城の賢なるはこの柳かな　其角

芽柳に杖かゝるまで見えけり　鬼貫

川ぞひにふけしき蔭のつく柳かな　琴竹

朔日二分柳乃新く匂ひかな　荷兮

うの川も晩風わたしきく柳かな　宗因

蓬にも麻にもまじれ柳かな　十磨

柳かりし風にそよぐ柳かな　麦柏

○故事　柳之十圍ジウイ　桓温クワンヲン北征シテ金城ヲ經テ瑯琊ヲ治ムル時ウヘシ柳十圍ナルヲ見テ慨然ガイゼントシテ曰木キ猶ナヲ如此カクノゴトシ人何ヲ以テカ堪タヘンヤト云テ枝ヲ攀ヨヂテ泫然トシテ涙ヲナガス

百尺ヒヤクシヤク　高頬　隋ノ獨提カリレトキ家ニ柳樹アリ高サ百尺バカリ車蓋ノ如シ父老相伝テ此家當ニ貴人ヲ出スベシト云ヒシカ後果メ宰相ニ至ル

△荇せう　異名　△水英。苦𦳝。女菜　△根白艸　新撰六帖　すゞのねのしろき　かへよ名づく

[illegible]の[illegible]つもんやせ川のせり

詞 春日弾。書淵の沢。淺沢小野。堀が原昔の人。月。[illegible]

小芹。深根芹。若せう。沢の芹。深ろ[illegible]。[illegible]の芹。[illegible]の芹。[illegible]の芹。[illegible]

俳 ぜうつむ[illegible]て酒[illegible]。[illegible]

根芹。[illegible]

浮[illegible]芹。[illegible]芹の花 同

女菜 芹の事。一説[illegible]。別ふ名ぐと

[illegible]の外ふ別ふ名ぐと

[illegible]説あれども

七日の若菜七種。十二種ともせ

[illegible]の名目[illegible]

是と[illegible]時ハせれ異名[illegible]

[illegible]の女ふ[illegible]

[illegible]の女ふ山田の[illegible]畔つくり[illegible]

[illegible]神を[illegible]

蘩菜 冬ふ到後萌て生ど三三月[illegible]ん菜護生艸とも云

蘩蒿 順和名曰[illegible]

[illegible]高ふの[illegible]

[illegible]の[illegible]菜の[illegible]

嫁萩 蘩蒿の[illegible]

[illegible]の門ハ邪[illegible]

[illegible]貢。右。[illegible]

[illegible]色々説[illegible]三[illegible]

嫁菜 雞児腸。[illegible]

椿 玉椿 椿共云 白玉椿。唐海石榴 列々椿 伊勢椿

二階椿等別種。[illegible]数百種[illegible]

○山茶・海石榴・椿椿・[illegible]椿・[illegible]

皆[illegible]訓[illegible]尚説多[illegible]

[illegible]後編[illegible]

波稜菜 異名 波斯艸。赤朴艸。波稜菜。正月[illegible]物春喰

穀精草 栽星州三月の内田の中に生ず葉石菖のごとく花小さく丸くして白く光あり星のごとく秋とん

秦椒皮 山椒皮ともいふ。山椒の木のかわ

雑菜摘 雑菜とは春の諸の菜のこと

山葵 山中の水ちかく生ず人家に作る三月苗生ず

獨活 芽獨活ともいふ風をさふ獨活ゆゑ名づく

(俳) 風ひかぬ人の姿出もとめうどかな 絲桐

○一説に八二月の季とするもあり

三葉芹 三葉は末より二月苗生と事喰ふ○一説に八正月ふとる説もあり又二月ふとる説もあり可考

麋美の花乃句 言葉え

苔脯 海苔ともいふ。海のこけ。いろく種類あり次に記す

青苔 乾苔ともいふ味美くも出るものあり

神代苔 石の上に生ずるものあり

於期苔 海中石の上に生ずるものあり

浅草苔 江戸浅草

加太苔 紀州濱多出る

櫻苔 色黄に櫻の花とちがはず

松苔 大きく松花に似る 十六鳴苔 雲州多く出る

(俳) 水や何おもしまの苔の味其角

青苔や潮さゝれし孫別松 尺艸

(狂) 武蔵あさ草苔の名のこゝろ

はるゝろぢしの深川のりの 信海

袖ぬれて海士のうりかす青苔や

ゝるとさいふてやまんこやする

鹿角草 鹿尾草。六味菜ともいふ。海中に生ず形鼠の尾の如く色白(三)(五) 伊勢物語 業平朝臣

ろしあ〜ぶむ〜ぶ〜ぶ〜ぶ〜ぶ〜ぶ

そのきりのない神代ふつも
(俳)ちるあやひきを拾ふのれつじ其角

石蓴　若和布ともいふ。南海の石まつも〻生じて色青し

海雲　海藻なり。其形乱れ〻る糸のおとし詩国
うゝ出る岸和田に対州より出る多尤
うゝ。俗わかめ

種植　三月の季なり又正月也蒔子　紫菜　菜漬

移栽　正月移し栽るゝ上時発生の氣を得て能生活する故なり廿日過より
来月十日ごろ迄の中より地氣
に月に隨てさうなり汐を見て
ちゝべゝ氣盛んなる時木の鬱皆
枝葉にあり是を移し栽るゝ其性
を破る移し植るゝ紀土を半分
入棒と以て土をつき堅くしべゝ
土をやゝうゝる土を加へ地面より
二三寸高くしてよ土をくるとき
高く置べゝ後半月をう
に毎日水を洒ぐべゝ。まゝ木を
移し栽る時は東西南北の考を
木に注す置て穴をかつゝくこと
くひろく堀りて根のをぶ
らぬやうに栽べゝ大木を
鳥居木をたてゝそれには
てのげてたち根の折
ざるやうにをべし

春生類

春の季なれども(三如此印ある)は二月ふる用也

鶯　本朝にて唐土にて鶯のかと
ちちぐふとゝ
ともるゝてゝり雅音いひ〻
唐土の鶯は大さ本朝の鳩など有
身はとぐれて黄色なる鳥也黄
鳥も黄鸝ともゝ嘴と足は赤
羽色は黑又日本のうぐひすは
黄頭鳥と名付て別物也(鶯水の説)

異名　商庚　鸎黄　楚雀　摶黍
黄鳥　谷鳥　谷鳥　黄公　百喜
黄鸝　黄飛　倉庚△花見鳥△匂鳥
ことめ鳥△経よみ鳥△歌よみ鳥

連　鶯は明くれさくらの枝にのるか　紹巴
俳　鶯や声のまとひき楽和声に　其角
鶯のなけハ何やら門あり　鬼貫
鶯の和声や深しゆふ志き　移竹
鶯にとられぬ梅のあつさかな　来山

（廿一）藏玉　花見鳥の證哥
花ハさやかにふるらゆく山里の
匂ひまさりてみけらる花見る

藏玉　にほひ鳥の證哥
山里ハ雪きえずとも匂ひけり
梅ハおのれを神をひきつゝ

文治百首　定家
鶯の宿しめ初るくれ竹に
まだふしなれぬねをもらすかな

家集　初聞鶯　定家
あら玉の年は和らぎあらふき
野山のそらにきなる　鶯

弘長百首　竹鶯　為氏
よしあしのみどりの竹に鶯の
春はうちふし千代ぞなくなる

嘉保哥合　旅宿暁鶯
明ぬとていそぎ立田の旅ねかな
鶯の声やせぬ乃宿より

建仁哥合　関路鶯　家隆
雪のこる山をさし白川の関守は
あけぬ乃にかかる鶯乃もらす

夫木　雪中鶯　小宰相
あの花に春の色しと鶯の
なけども雪ハふる乃神楼

同　故郷鶯　行能
鶯の春をしれるすみかのみやこより
ゆきしれ志めゆのひとしらぬ

夫木　寒野鶯　家隆
あら山谷の鶯かすみに出る哉
なけどもいまだ春の花は雪

夫木　松上鶯　小大進
めづらしき松の緑ぞ春めきて
かきくらす鶯のしる

宇治百首 朝鶯 為家
ゆめさめて鳴らくの竹のはのかれ
かいらよせてやうぐひすねなく

金葉 山家鶯 摂政左大臣
山里もうき世の中をはなるれど
谷乃鶯ねをのみぞなく

夫木 田家鶯 俊成
まほらとが秋のた稲を松ね
備ごもふきさきの声ぞ名

同 浦鶯 家隆
鶯のまろふさるけが錦波うつ
うらわたるさし鶯やなきたる

㊂詞 鳴く声。あつさふかいみそかる。
来なく。百さ得り。さへづる 囀
まかりてなく 谷 谷は古巣。谷の
雪 雪は本ぼこ雪の中に春
戸ある 軒 軒ばの鶯。新蝶あさみる
霞 霞の中。霞にむせぶ。霞なる
朝 朝のまだき。朝まだすなく 文
されの春。梅くてなる。囀なる
垣根 さきぬる垣に竹の梅にて竹
の葉がくれ 初音 いとま鳴。

春はすぐる 暮春 行春おしむ 古巣
にかへる 友 友よぶ。友鶯。梅 梅の木うつり
柳 うつる 柳の鶯。柳のあをみく。
暁 ふく鳴く 花にてつく 巣たつ
鶯鳴くの鶯。鶯の淺れ。見へ
声。今表鶯。鶯よむ。鶯よむ鶯笛

㊂狂 銭絹で雪ふさるくば鶯乃
なく 梅が経も一ぶ八分ん 次良
梅が枝にそるくの花てんらくさ宗
に笹のうひやうらむす 宗俊

㊂詩 鶯五字對句
魚戲芙蓉水
鶯啼楊柳風

同上
騎離軒裳客
鶯囀翰墨林

㊂詩 鶯七字對句
林間花雜平陽舞
谷裏鶯和弄玉簫

詩礎
作春啼
始藏鶯

春山鶯啼修竹裏
ナゲヒスガサニナク ニナクノウナ

仙家犬吠白雲間
センカイマホユハクウンノマイタ

送好音
ウグヒスノコヘ

轉黄鶴
サヘヅルウグヒス

詩 鶯詞 唐 鄭暗

欲囀聲猶渋將飛羽未調巣立
ホツテセイコエナヲシブシハイトタトノヒハ

高風不
スハ

飛ントハスレ匹羽イトタハヘ名ヒヲ

日便何處得遷喬 歯谷ヲ出テ喬キ木ニウツルヿア
ヒ

リコレモ巣立 鳥ノ一ナレハ風カ手傳フヿ

ナクハイヅレノ處ニカ喬キ樹木ニウツリ

居スルヿヲ得ナントス

詩 鶯詞 鄭谷

春雲薄々日輝々宮樹煙深隔
シヨウウンハクハクヒキ〻キウジユケムフカクヘタテ

水飛カスミウスク空ニ日景ノトカナル二木ノ間カクレニ鶯ノ飛カフヘ

為餘歌繫仙籍麻姑乞與女真
タメニヨクウタフカヘツナ センヤクヲテ マコヒアトラヲキノシン

衣
イ

餘歌ヲ戸ヲ ナス ニハ仙家名籍ニモ

カ、ルベシタトハ麻姑カ故事ノ如シ

○鶯之故事

鶯梭 梭ハ女の機織る時と

差兒笛 鶯声を巻

秦女笙 鶯の初音のさへづりを秦王の女子弄玉と名人の笙ノ音とをなぞらへ

仙韶九成 鶯の音樂

衣公子 鶯を

いふりのえ鶯の梢枝を飛ぶる様子のいまるにいかあ梭を投て機とゆく如くかるさはるとびとうるうるとうるうる児の草笛を吹き とさむみたとへるを

言仙家の音樂 ふ似さうとぞ

称美してよく詞なり羽の黄色なると金衣ともいふ

鳥の囀 水鳥さへづり并に諸鳥のさへづり皆春へ

百千鳥 春いすべての鳥がハ鳥づると以てもろく鳥

といふべしとく鶯の名とかける書もあまたゝいくぐと覺るよりは顯照の說をうけたる鳥或は鳥の千声なぐしても春るべ

(三) 古今百子名こへる春はあるべしとも我をふりゆく人ちとす

(俳) 河上の柳の梅のつぼみ白魚の高ちをう其角 別 白魚の

竹の串とりて白魚の目をつゝ[illegible]ゝて賣べ[illegible]ゝ専出る

鷽 (うそどり) 形鶯より大小黑色声琴と調ふ似ざう故晴呼雌雨とよめる

駒鳥 (こまどり) 頭と左右ふりて形走駒の如し故名づく春夏鮭嘴

(三) 雲雀 (ひばり) 日の晴ゝる時は高く上りて鳴く日晴と心ゝ名づく

(三) 干鱈 (ひだら) たゝれ[illegible]ゝ諸國より京師大坂等へ春は多くとりきたる故奈の季とするなり

(俳) 干てもまぐ鱈の寒こゝ春浅き東鯉

春の部終

入用字引集 全一冊

世俗日く入用の文字を撰こあつめ考ふ用ひざる遠き文字ともぶく故字とひくふ甚ゝやく裏の早引なり

須 須原屋
市 澄
市 丟市
為 為
仮 也

文化元年甲子臘月發行
東都 須原屋茂兵衛
皇都 野田次兵衛
浪花 奈良屋長兵衛
岡 [illegible]